『剱岳 点の記』をよりよく理解するための解説

昭和32年の剱岳現地調査作業

元国土地理院技官　五百澤 智也

測手と書いてソクテと呼ぶ。昔，陸地測量部が日本全土をしらみつぶしに測量していたころ，測量官について歩き，助手の仕事を受けもって大活躍した人たちの官職名である。

彼らの出は，東北地方が主で，農山村の次，三男が多い。ふだんは家業にいそしんでいるが，農閑期に，あるいは陸地測量部の要望によっては家業をさしおいても馳せ参じて，その役目を果たすというふうであった。あったと過去形で書いたのは，いまもこの制度が生きているのかもしれないが，すでにひところほどの重要性はなくなったと思うからである。

私の地理調査所での最初の現地作業はこの測手としての参加だった。測手には等級があって，採用の時に経歴や能力によってまずそのランク付けが行われる。いったん登録されると，役所から仕事があるから従事できるかという連絡が時に応じてくるようになり，都合を返事しなくてはならない。仕事を重ねれば，その経験時間や能力向上に応じてランクが上がり，給料（日給）も増加する仕組みだ。

大学を出てから，臨時職員の形で働いていた私は，そのままでは外業（野外作業）に出してもらえない。そこで，まずは測手の登録をしてもらったのであった。

1957年，松本から大町を通って中土で終わりだった大糸南線と糸魚川から小滝までだった大糸北線の中間部が開通した。まだ大糸線とはいっておらず，時刻表も北線と南線を乗りつぐ形になっていた。直通列車（大町発で糸魚川まで行くもの）も一日二本しかなかった。だから，この新しい大糸線を通ってみたかった私は，中央線経由で大町に一泊して，富山県には翌日の午後になって入った。

宇奈月乗換えの黒部駅の伝言板で，愛本にある宇奈月町役場に出頭すべしという書き込みを発見。富山地方電鉄を愛本で降りて，役場へ行くと，作業班の宿舎がわかった。そのまま下流へ歩いて，黒部川の平野への出口，ダムの橋づめにある宿でようやくメンバーと合流することができた。

予算がすくないため，立山・黒部・五百石の三図葉の外業は，三名の測量官，一人の班長に対し，測手は私一人だった。人夫も雇えないので，私はそれぞれの図葉の大変な作業の部分を応援してまわることになった。

黒部図葉の最初の仕事は，宇奈月から南に，僧ヶ岳につながる宇奈月尾根を登り，僧ヶ岳や駒ヶ岳の三角点を利用して，まわりの地形地物の位置や標高を点検する仕事と決まった。メンバーは班長の西村蹊二さん，技官の川崎さんと合わせて三人である。

宇奈月を出て四日間，僧ヶ岳と駒ヶ岳の三角点での平板による点検測量作業はつらかった。草いきれ，陽の照りつける登りに，三人ともすっかりまいった。

しかしその疲れ切って着いた山頂で，しっかりと仕事をするみなさんの測量士魂には敬服してしまった。私も，雪渓の底をくぐったりガラ場をおりたりのルート開拓や，雨中の焚火に実力を発揮し，すっかり信用を得たことはうれしいことだった。

黒部駒ヶ岳から片貝川北又谷を下りてきた西村班長，川崎さん，私の三人は，トラックで魚津へ出て，そのまま愛本の川崎さんの根宿（ベースハウス）へ戻った。しばらくぶりの人里は暑くて大変だったがビールが飲めるのはうれしかった。

翌24日，私は西村班長について富山市へ行き，当時市役所の一室に間借りしていた建設省地理調査所北陸地方支所（現在は国土地理院北陸地方測量部）に挨拶に寄った。それから二人は，五百石担当の広沢技官の根宿，大山町上滝へと回った。

広沢さんは上滝の駅の南側，KNさん宅を根宿にしていた。測量で出張すると，作業者は役場の紹介や自分の聞き込みで作業期間内ベースとする宿，川崎さんのように旅館のときもあるし，広沢さんのようにいろいろな作業員をよく下宿させてくれる個人宅の場合もあるのだが，その宿を決め，役所の上司や作業班長あるいは作業班長と連絡のとれる市町村役場宛に「根宿情報」を発送しておくのである。

われわれは，川崎さんの根宿へきていた広沢さんの根宿通報（いま机にひろげてみたらこのタイトルが使ってあっ

た）を見て出発したのだった。この通報には，所属，氏名がまずあり，次に，一，根宿地・住所・舎主・電話一，期間　一，順路及略図が示してあり，立山図葉担当の武久技官の根宿が，郵便のきかぬ（当時）立山山中のためにその連絡により併記してあった。

測量官は，現地に着いたらすぐ，この根宿報告のために，まず駅やバス停から宿までの間を中心に目標となる建物やお店，そして道路などのようすを看てとって略図を作る。彼は，これを手はじめに，後はずっと常に地図を作る眼であたりの景色や風俗，そして街並みを観察しつづけていくことになる。だからウインドウ・ショッピング，飲み食い，散歩などもこの分類作業＝クラスフィケーションの一部になってくる。

いま宿に着いたばかりの作業員でも，すでに役場，郵便局はもとより，もよりのポストやタバコ屋の場所もすでに知っているはずだし，仕事が終わって根宿を離れることになると，その土地で長く暮らしている人以上にその土地のことに詳しくなっているのが普通である。

ぼんやり歩いているようでも，彼の頭の中の平面図には，新しい情報が書き加えられたり，まちがいが修正されたりしている。だから，地物の位置や方角ということになると，それを意識しないですごしている土地の人より彼の方がくわしいことがままあるのである。

広沢さんの仕事をしばらく手伝った私は，西村班長と合流，次に立山地獄谷に根宿をとる武久技官のお手伝いに入った。そして，いよいよ劒岳へ一人で登ることになった。以下その記録をしるそう。

1957年修正測量で下がった劒岳北西面・早月尾根（画・五百澤 智也）

8月30日，5時48分，地獄谷の房治小屋出発。途中，雷鳥沢で，4メートルばかりの棒を用意する。劒の頂上に赤白の測旗を立てるためだ。針金やペンチや釘などは用意してある。劒御前の小屋で7時15分から20分まで5分休憩，劒山荘上の鞍部で8時から15分，前劒頂上で20分の休憩をして，劒岳頂上には10時40分についた。

岩場では4メートルの棒がじゃまだった。手が一本ふさがっているだけでなく，上やら下やらがひっかかったり，ぶつかったりしてやっかいである。それでも頂上の祠（ほこら）に一端をとめて，旗のつけねからあたりの岩塊に針金を張ると，赤白の旗が風にはためいて，気持ちがよかった。苦労したかいがあった，むくわれたという感じが旗にあった。ヒマラヤあたりで初登頂の旗を立てるのは，さぞかしいい気分のもんだろうなと思った。

空中写真を実体視（ステレオ観察）して，まわりの植生状況，登山路の位置，雪渓の範囲などを観察し，重要と思われるものを記録した。

劒沢の谷頭部はまる見えで，幾筋もの残雪が見えた。今村学郎氏がカールと認定した最上流最高位の小カールと，誰も認定していない劒山荘のあるハイマツの茂った小カールとは，形状，大きさがそっくりであった。それらをひっくるめた全体もやや浅い感じのカールというか氷食谷であり，それが部位に応じて再浸食されたように見えた。11時30分，残雪分布を記録する写真をとった。

11時40分，南へすこし戻り，早月尾根（はやつき）へのコースをとった。すぐの小ピナクル（尖塔）は右側をまきぎみにして次のカニノハサミのつけねに出たら，もう一度右をまわりこむように行く。次の鞍部はガラ場で，そこから二つくっつい

たようなピナクルに針金のついたところを登る。はじめは鞍部からまいてしまおうとしたが，側稜にでるところが悪くて，戻って針金沿いに登った。ここからは尾根の上をしばらく下る。すると白いガレのある横尾根が北側すなわち右手にのびているところへ出た。

ここから見る劔岳頂部の西壁がいい。赤くボロボロにくさった感じだが，凄絶な眺めだ。白馬の主稜，この劔西面と，北アの高い頂部の東面と西面両側ともこういうふうにもろそうなのは，山脈形成の機構あるいはこの北アルプスの形成の構造的な作用と関連するのではと考えながら野帳にスケッチする。

12時40分着，13時ちょうど発。ここからは，かなり急傾斜の下りとなり，尾根のハイマツを右からからむように二つの突起をまきながら下ると早月尾根北面カールの草つき斜面に出た。これも丸い小ピークの右手をからむようにまわりこんで，鞍部と小さいコブのあるたるみに出る。野陣場（野宿地）である。ここでまた休憩。

25分後の14時10分までまたスケッチする。さっきのシロガレ尾根の下部から劔尾根のほうまで，ハイマツ帯の分布が稜線からある幅で平行になっているようすがわかる。絶対高度でなくて相対高度というのは，風の強さが分布を規制する因子として強く働いていることを示すのであろう。そのようすをスケッチした。

この野陣場の上でそのハイマツ帯が終わって，カールは草地，まわりの尾根にはナナカマド，ダケカンバ，ミヤマハンノキなどの低木が茂っている。

次の測旗をあげる1920.7の三角点は，現在避難小屋のあるところよりすこし下ったところにあるのだが，そのころは避難小屋はまだなく，ただ誰かの露営跡のようなセブリ（仮小屋）の残骸があった。そこをすこし下ったあたりにコンクリートの標石主三角点というのがあった。これは林野庁の三角点であり，陸地測量部が埋めたものではない。陸地測量部の標石は必ず御影石（花崗岩）だ。

そのかんじんの御影石標石がみつからないままに地形的な地形図上の三角点付近の立ち木の上と，この主三角点の上とにそれぞれ測旗を掲げてみることにした。5万分の1では1ミリが50メートルである。このあたりのヤブの中に三角点がまぎれていても，アリダード（平板測量用の傾斜を測る器機）の視準線はだいたいいいところにくるはずである。

ともあれ，他の三角点どうしで平板を整置してもらい，アリダードで逆に測旗の位置を点検してもらうことにしよう。とにかくうかうかしていると未知の土地で夜歩く危険をまねくのである。主三角点のほうの仕事が終わったのが16時30分。あとは急いで下った。

尾根が細くくびれた下のところに直径15メートルばかりの地塘があり，道は向こう側のマウンドをこえて尾根の右手を下る。現在松尾平と呼ばれている台地状のところへ出ると，立山谷へ行く道，大窓へ行く道など合計6本の山道が分岐していた。これではうっかりすると迷ってしまう。

白萩川と立山川の合流点のすこし上で立山川を丸木橋でわたると，左岸に小さな飯場の小屋が二軒と取入口の小屋があり，登山者向けの掲示板が前に立っていた。合流点のすぐ下に堰堤があって，ここから自動車道がはじまっていた。

ここで19時。すでに暗い。下流の登山者の間でゾロメキ発電所と呼ばれている白萩発電所で19時30分だった。

事情を話してここで泊めてもらうことにした。ゾロメキというのは発電所付近の地名だが，発電所名は白萩発電所，水の取入口は本線と小又川と二つある。

まだ営業していないできたばかりの馬場島荘は町営の年間営業の山小屋で，馬場島は合流部の二つの川にはさまれたほそ長い一帯の地名であること，早月川本流の水深が約1メートルであること，測量作業の痕跡は富山営林署，磯部町担当区のかたが中心となって保安林買上げのためにやった測量であること，くわしくは富山営林署早月川治山事業所へ行けば資料があること，などいろいろな情報をもらい，夜おそくまで発電所保管の図面から，白萩発電所付近，地下水路の馬場島の本線取入口付近，小又川取入口付近の地図をトレースした。

こうして，長い長い劔岳登頂の日は終わった。

なお，劔岳の劔の字は，地元市町村が地名調書にこの字を使うように指定している字である。常用漢字では剣であるが，地形図ではそのため劔が用いてあるのである。

■五百澤氏の紹介はこちら
http://www.jsurvey.jp/tsurugidake/iozawa.pdf

著書紹介

『山を歩き山を画く』
講談社現代新書821，p.139～p.163
より転載
（昭和61年（1986年）7月20日刊）